

第1443回 (11月14日)

## フィリピンにおける灌漑システムの現状と課題

茂野 隆一

本報告では、フィリピンにおける灌漑システムの導入過程、運営、維持・管理等の現状について整理し、また国営システムおよび水利組合の事例を紹介した。それらを踏まえ、フィリピンの灌漑システムが直面している問題点について次のような指摘を行なった。

① 財政問題。1983年からのマルコス政権末期の政治的混乱は、同時に経済の停滞を引き起こした。その結果、フィリピン政府は大幅な財政削減を余儀なくされ、灌漑関連の予算も急激に減少した。また、同時に外国への資金返済が財政を少なからず圧迫している。

このような財政問題は、当然のことながら灌漑投資およびシステムの維持・管理に大きな影響を与えている。すなわち、近年における大規模な灌漑開発プロジェクトの減少、また補修工事の大幅な遅延、動力費不足によるポンプの稼働率の低下等である。こういった状況に対し、灌漑庁は業務の合理化等によって対処しているが、根本的な対応策を欠いているというのが現状である。

② 国営システムにおける水利費徴収率の低さ。国営システムでは、受益者から徴収する水利費によって、維持・管理、保険、初期投資（借入金利子を除く）費用を賄うこととされている。しかしながら、水利費徴収率が低いために、実際には初期投資はおろか維持・管理費用もカバーできないというのが現状である。この原因としては、a. 灌漑用水の供給量（特に乾期）が不十分なために、農民がシステムのサービスに満足していない。b. 雨期においては、天水だけでも栽培が可能なたため、システムの必要性が認識されない。c. 参加意識が希薄なために発生するモラルハザード。d. 受益者を特定することが難しいと

いった点が指摘できる。

③ リハビリテーションを必要としているシステムが多数存在しているにもかかわらず、その多くが補修工事を受けられない状況にあること。補修工事が遅れている原因としては、上述の財政問題、水利費徴収率の低さを挙げることができよう。さらに、これまで行なわれてきた森林の乱伐が土砂の流出を招き、ダムや用水路に堆積しているということも無視できない要因である。

④ 米の国内自給をおおむね達成したことにより、従来の水田灌漑中心の方向に見直しが迫られていること。フィリピンにおける米の自給は、1970年代後半にほぼ達成されたといわれている。もちろん、今後の人口増加や、とうもろこしから米への代替等による需要の増加も考えられるので、米の増産はある程度持続させなければならないが、従来のような急激な米の増産は必要とされないと考えられる。その一方、農村における貧困問題は深刻であり、農地改革と並んで農民の所得向上は国政上の急務とされているが、その意味で農業所得の向上に結びつく灌漑開発は今後も重要である。したがって、これからの灌漑開発も、米に替わる新たな作物を模索する方向で行なわれると考えられる。

以上の点は、同時にアジアのいくつかの国々が共通に抱えている問題であり、早急な対応が迫られているといえよう。なお、詳しくは『農業総合研究』第44巻1号(平成2年1月刊)の拙稿を参照されたい。